

原子雲の下に生きて

長崎の子供らの手記

永井 隆 編

中央出版社

原子雲の下に生きて 長崎の子供らの手記

昭和52年8月9日 第1刷発行

編 者 永 井 隆

発行所 中 央 出 版 社

〒160 東京都新宿区四谷1の2
電 話 (03) 357-6401 (代 表)
振 替 東 京 2-62233番

印刷所 聖パウロ会八王子修学院

(落丁・乱丁はおとりかえいたします)

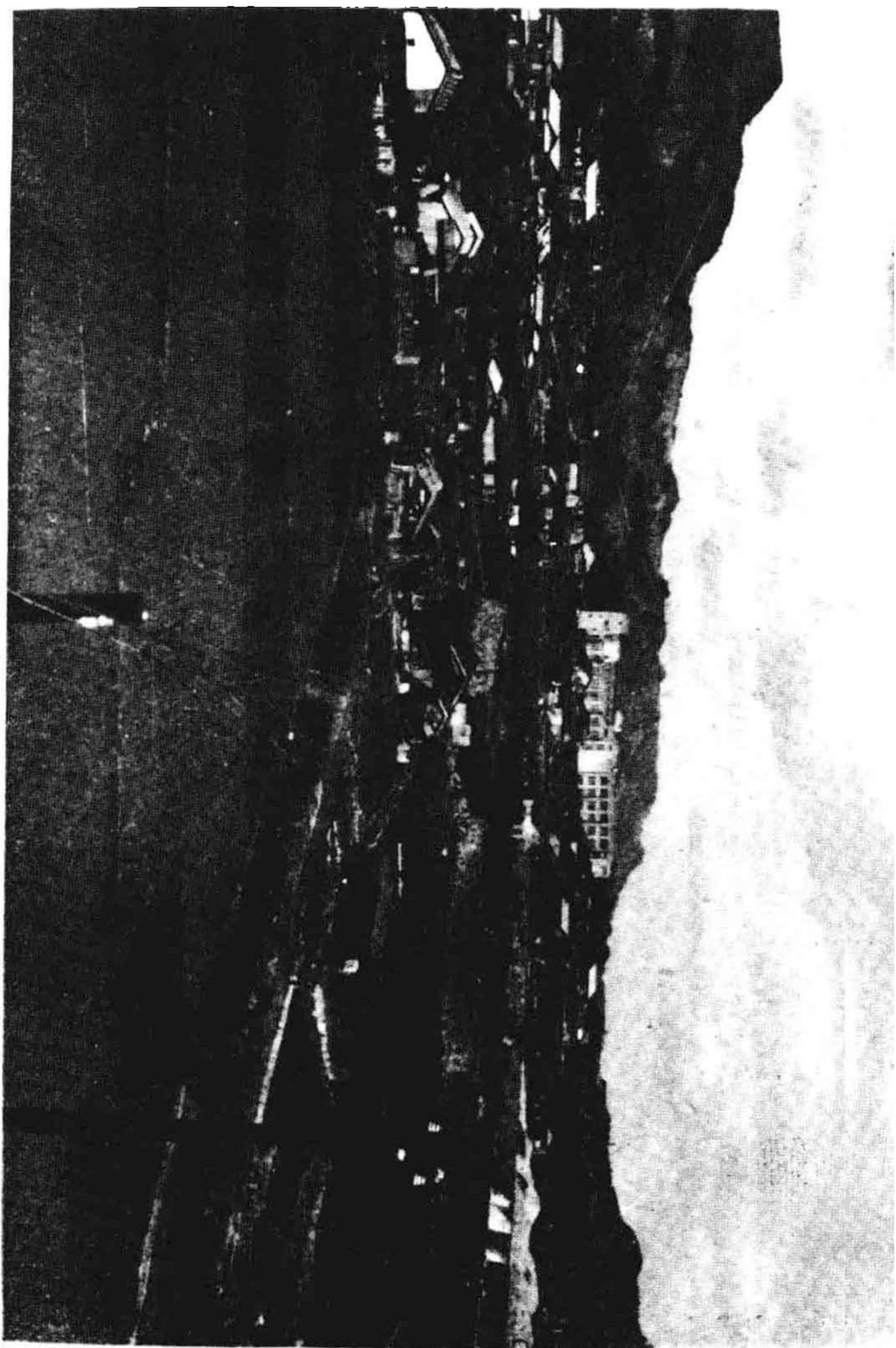
原子雲の下に生きて

長崎の子供らの手記

永井 隆 編



中央出版社



蘇える浦上原子野



原子爆弾中心地付近

辻本 一二夫（当時五歳）

原子ばくだんが落ちたとき、ぼくは、山里小学校の運動場のすみのがけに掘った、防空ごうの中にいて助かったのだが、あの時、小学校にいた者で助かったのは、僕と、おばあさんと、田川尚士君と、三人だけではなかったろうか？ ……

ほかにおっても、わずかのものだ。みんな死んでしまったから……

——警報が鳴ったので、上野町の年寄りと、子供は、みんな、いつもきめられた通り、あの防空ごうへひなんした。学校には、警防団の本部もあったし、救護所もあったので、警防団の人々や、お医者さんや、そのほか、たくさん大人の人も来ていた。また、学校の先生方もみんな出てきて、働いておられた。

飛行機が来ないので、警報は解除になった。それで、みんな、防空ごうから外へ出た。た

くさんの子供が、大きな声を出して、運動場いっぱい遊びまわっていた。

大人の人も、先生方も、みんな運動場へ出て、のびのびと休んでおられた。運動場は、いっぱいの人で、にぎやかだった。

——ばく音を僕は聞きつけた。

ほかの子供たちは、あまり大きな声で騒ぎまわっていて、きこえないらしかった。

僕は、おばあさんの手をつかまえて、防空ごうの方へ走った。

「——敵機——」

と、小学校の屋上の見張りのおじさんが、どなって、鐘をたたくのがきこえた。

「ワ——ッ」

と、運動場にいた人々は、防空ごう目がけて、走って来た。

ぼくは、真っ先に、ごうの一番奥へとびこんだ。

もうそのとき、

ノ——ッ——と光ってしまった。そして僕は、強い風で、ごうのかべにたたきつけられた。

しばらくして、僕が防空ごうから外を、のぞいてみたら——運動場いちめん、人間がまいてあるみたいだった。

運動場の土がみえぬくらい倒れていた。大ていは死んでしまつて、動かなかった。

しかし、あちこちに、足をばたばたさせたり、手を上げる人もあつた。動ける人は、はいながら、防空ごうの中へ入つて来た。それで、ごうの中も、けが人でいっぱいだった。

学校のまわりの町は、みんな燃えていた。僕のうちの所も、勢いよく燃えていた。

兄さんも、妹たちも、みんな防空ごうに走りこむのがおそかったので、やけどをして泣いていた。おばあさんはロザリオをとり出して、お祈りをしていた。僕は防空ごうの入口に座つて、お母さんとお父さんとが来るのを待った。

三十分もたつてから、お母さんがようやく来た。血だらけだった。

お母さんはうちで、お昼の御飯の用意をしていて、やられたのだった。お母さんに、すがりついたときのうれしさは、今もわすれない。

お父さんは、待てども、待てども、現れなかった。

警防団で朝から出ていった……

生きていた者も、あとからあとから苦しんで死んだ。——妹たちはあくる日に死んだ。

お母さんは——お母さんもそのあくる日に死んでしまった。

それから——兄さんが死んだ。ぼくも死ぬと思った。——防空ごうの中で、ならんで寝ているだれもかれも皆死ぬんだもの……。

けれども、僕とおばあさんは、ごうの一番奥へ入っていたので、放射線をうけなかったらしく、とうとう助かった。

おばあさんと僕と二人は、それから毎日、死がいの顔をしらべてまわった。お父さんを見つげるためだった。——けれども、お父さんは生きているものやら、焼けてなくなったものやら、どこにも見つけ出せなかった。

生きのこった人たちが、運動場に木を集めてきて、そこでたくさん死がいを焼いた。

兄さんも焼かれた。お母さんも、見る見るうちに骨になって、おきの間から下へポロポロ落ちた。――僕は泣きながら、じっとそれを見ていた。

おばあさんは、ロザリオの祈りをしながら見ていた。

おばあさんは、天国へ昇ったら、お母さんに会えるのだヨ、と言うけれども、おばあさんは、もう年寄りだから、あとすぐ天国へゆけるだろうが、しかし、僕は、まだ子供だから、あと何十年もさきでなければ、あのやさしかったお母さんに会えない、兄さんとも遊べない、かわいい妹たちともお話できないのだよ……。

僕は、山里小学校に入った。いまは四年生だ。あの運動場は、すっかりかたづいて、たくさんの方たちが、大よろこびで遊びまわっている。あの友だちは、ここでたくさんの子供が死んで、焼かれたことを知らない。

僕も、友だちといっしょになると、元気で運動場をとりまわって遊ぶ。けれども、どうかしたときには、ふっと、あの日のことを思い出す。

そして、お母さんを焼いたその所にしゃがんで、その土を指でいじる。

竹で深いいじると、黒い炭のかけらが出る。その所を、じっと見てみると、土の中にボーツとお母さんの顔がみえてくる。

ほかの子供が、その所を足でふんで歩くのを見ると、腹がたつ。

運動場へ出るたびに、僕は、あの日を思い出す。運動場はなつかしい。そして悲しい。

僕は、この学校へ、あと四、五年通う。

そのあいだ、やっぱり毎日、こんな気持ちになるだろうか？ ……

お母さん、兄さん、妹たちの骨は、おばあさんと二人で、おそうしきして、墓にうめた。けれども、お墓には、お父さんの十字架は立ててあっても、その下に骨はない。

——お父さんお父さん、お父さんの骨は、どこにあるのですか？

どこに寝ているのですか？ お父さん。あの朝、元気で出ていったきり……

今、焼けあとにバラックを建てて、おばあさんと二人暮らしている。おばあさんは、もう六十を越した年寄りだが、働かねば何もたべられないので、浦上川の川じりへ、アサリをとりにいく。夕方ビッシヨリぬれて、帰ってくる。

そのアサリを売って、二人は生きている。

むかしは店をひらいていた。シヨウユも、シオも、ミソも、お菓子も、おもちゃも、売っていた。それに、お父さんは、井戸掘りの名人で、いいお金をもうけた。僕たちは、よい着物を買っていた。

もう一度、むかしにかえして……ああ、

お母さんがほしい

お父さんがほしい

兄さんも、ほしい

妹たちも、ほしい

みんなが生きていたら……。雨のもらない家で、おばあさんも、こんなにむりに働かないで、僕も、楽しく勉強できるのに……

けんかにも、負けなくていいんだけど……。おばあさんは、毎朝、天主堂へお参りして、ミサにあずかる。また、ロザリオの祈りをよくとなえる。そして、僕に、

「みんな、天主さまのおぼしめしタイ。よカよカ」

と言つてきかす。

……ぼくも、おばあさんのような、きれいな心になりたい。

宮田 順子（当時四歳）

そのころ、わたしは、おかあさんといもうとと三にん、シコクのいなかに、そかいしてい

ました。

ナガサキに、げんしばくだんがおちて、おとうさんが、かいしゃで、しんだという知らせがきました。それで、ナガサキへきてみました。いえはこわれていました。

わたくしの、にんぎょうがちぎれていました。

永井 かやの（当時五歳）

わたくしはコバの山のいえに、にいさんといっていました。おかあさんが、きものをもつて、ナガサキのまちからきました。

「カアちゃん、カヤちゃんのきものも、もってきてくれたト？ ……」
と、わたしは、すぐきました。おかあさんは、